

うねび

## 「畝傍の山」

思ひあまり

いた

甚もすべ無み

な

たまたすき

うねび

玉襷

畝傍の山に

われは

しめゆ

標結ふ

作者：未詳（巻七―一三三五）

（解説） 思ひあまって全くどうしようもなくなつて、

私は畝傍の山に占有の標のしめ縄を結うことである。

・この歌は、「山に寄する」と題する歌の一首である。

・思ひあまりは―思ひあまって

・甚も術無みは―「全くどうしようもなく」との意。  
いた すべ

・玉襷たまたすき畝傍の山に―「襷（たすき）」は衣服の袖をたくし

上げるため肩から「項（うなじ）」にかけて結ぶ紐のこと

で、この項（うなじ）と同じ音を含む「畝傍」にかかる

枕詞であるといわれている。

・畝傍山は古代から畏敬の対象であることから恋の相手

が、身分の高い人であったことを示しているとの説がある。

・しめゆ標結ふー標は自己の占有の地であることを示すため、しめ縄を張ったりしてむやみに他人が入ってくるのを防ぐことにした。そこで転じてここでは、恋した相手を自分のものとすることを指す。

・畝傍山（高さ199m）は奈良盆地の南部（奈良県橿原市）に位置し「香具山」「耳成山」と並んで「大和三山」の一つである。

（参考文献）・日本古典文学大系「萬葉集二」・佐々木信綱著「万葉辞典」外、

（写生地）畝傍山の西麓に鎮座している畝火山口神社の境内か  
うねびやまぐちじんじや  
ら本殿を木々が取り囲むように生い茂る畝傍山の麓を描く

（池田杏花）

